特別企画
Noriko Obana

現代の中学生と「インターネット」「ケータイ」との関わりを考える

IT時代に生まれ育つ子どもたちと向き合おう

インターネット、携帯電話によるトラブルに、中学生が巻き込まれることが増えています。いくら目を光らせていても、わからないところで動いていくネット環境。中学生を危険から守るためには、どのような指導をしていけばいいのでしょうか？インターネットに関する教育の専門家・尾花紀子さんにお話をうかがいました。

あなたの子どもの頃の記憶に、ITツールは存在しますか？

ご存知のように、今の中学生は1993年4月～1996年3月生まれです。インターネットが日本で商用化されたのは1991年、生徒たちが生まれる数年前からインターネットが使われていたことがわかります。パソコン・携帯電話利用はもちろんのこと、1995年にはインターネット環境がパソコンに常備されました。中学生たちにとってのITツールはあって当たり前の存在、なかった頃を想像することもできない世代なのです。

では、先生方は？保護者のみなさんは？

自分たちが子どもだった頃、使った経験もなければ、教わった経験もない、存在すらしなかった「ITツールは自分の人生よりも後発の文化」である大人には、中学生たちとの感覚の溝を埋めることは物理的に不可能。

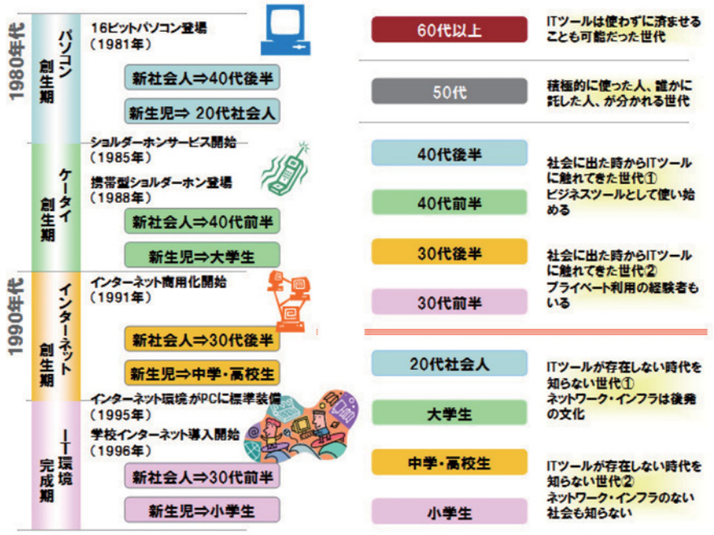
まずは悪あがきなどせず、潔くあきらめましょう。そして、彼らの何倍も生きている大人の〝知識〟と〝経験〟と〝判断力〟で、未成熟な子どもたちを正しく導いてあげましょう。苦手だからと遠ざけていては、埒が明きませんよ。

子どもたちの環境を冷静に見つめると…

IT環境が整いつつある頃に生まれた子どもたちですから、大人の実用ツールとして使われているパソコンやケータイに触れる機会は、10歳くらいまでにやってきます。また、多少の地域差はあるものの、1996年には学校へのインターネット導入が始まったので、小学校の授業中に教わり〝それなりに〟操作できるようになります。中学生になる前に、自分のホームページやブログをつくって運営する子もいるほどです。

統廃合の影響で通学距離が長くなった生徒も少なくありませんが、子どもが巻き込まれる事件や犯罪もあちらこちらで起き、保護者の心配の種はつきません。それなのに、小学校生活6年の間に驚くほど街中から公衆電話がなくなり、ケータイを持たない人の連絡手段が激減してしまいました。塾やお稽古事に通い始めるのをきっかけに、「安全のため」とケータイを買って持たせるご家庭も増えています。

これらはほんの一部ですが、大人たちが育った時代とはまるで違う、環境の変化の激流の中で育っているのだということを、実感いただけたのではないでしょうか。



マイナス面強調が過熱気味の報道

便利で不可欠な道具だという認識はあるものの、どうしてもマイナスイメージが拭えないという大人も大勢いる、インターネットやケータイの文化。それは、理解しがたい後発の文化だからではありません。「掲示板で知り合った男性と一緒にいた少女を保護」「陰湿ないじめの温床となっている学校裏サイト」「殺人予告で書類送検された未成年」などの過熱報道が、その大きな要因になっています。

学校の先生方が最も気にしている『学校裏サイト』が最たる例です。本来、生徒たちが自主的につくり、悩み相談なども含む生徒同士のコミュニケーションの場としても利用されていた学校非公式サイト。それなのに、マイナス面のみをクローズアップして報道し、『学校裏サイト』という名称で悪役としての市民権を得てしまいました。

本来、ネット上の誹謗中傷は禁止です。やってはいけない行為をすることを、〝みんなやっている〟かのように報道されたことで、全く知らなかった子どもにまでその存在を知らしめてしまいました。その数が急増したのも、呼び名が固定し、過熱報道がされるようになってからのことです。

ところが、悔しいことにプラス面の報道はほとんどされません。子どもたちが新しい感覚で工夫して使っているという現状は、まったくといって良いほど聞こえてきません。プラス・マイナス両面がきちんと語られることはなく、危機感をあおってばかりの社会では、大人も子どもも正しい認識を持てないのが当然です。マイナス面の報道ばかりが続けば、模倣する子どもが出てくるのも無理のないこと。子どもたちに影の部分ばかりを見せて、導線をつくっているのは他ならぬ大人たちなのです。正しい導線の引きなおしは、急務です。

大人だったら誰にでもできること

フィンランドの『キッズスキル』をご存知でしょうか？たとえば、授業中におしゃべりばかりする生徒は「おしゃべり」という問題を抱えているのではなく、「話す順番を待つ」というスキルに欠けていると考え、学ばせる教育方式です。

今の中学生の多くは、「これをやったらどうなるか」という先の先までのシミュレーション・スキルに欠けています。理由の一つは、大人ほどの経験値を持たないから。別の理由として、思いついたら即実行できる道具に恵まれ過ぎていることも挙げられます。

とはいえ、シミュレーションゲームが得意な世代、想像力が極端に欠如しているわけではありません。現実社会で行動を起こす前にシミュレーションする習慣がないだけです。

「いじめを苦に自殺」「殺人予告を真似た小学生が書類送検」「通り魔事件後に相次ぐ模倣犯、未成年も複数検挙」などの報道が流れたとき、

尾花紀子 おばな のりこ

1961年生まれ。日本アイ・ビー・エム株式会社に入社。各種コンサルティングや子ども向けソフト監修などに携わる。2005年にフリーとなり、IT 関連のアドバイザーとして活動。自治体や小・中学校向けインターネット利用に関する執筆・講演も多く、ネット教育の専門家としてテレビ番組にも出演。現在、監査機関の理事や行政機関の検討会委員として青少年保護育成にも関与。著作に『子どもといっしょに安心インターネット』全三巻（岩波書店／共著）。
公式サイト http://www.frey.jp/

朝礼や学活などで生徒たちと話し合う機会を設けたとしたら、普段の授業とはまったく違った活発なディスカッションが展開したはずです。インターネットやケータイ利用への関心がとても高い生徒たち。現実に起きた事件がホットなうちに、あれこれ思考をめぐらし、想像力を膨らませ、善悪の区別とともに議論してみることは、彼らの成長過程において大変有効な手段です。全校集会で校長先生が壇上から一方的に話すことよりも、よっぽど効果があります。こういった試みは、家庭でも行えます。ニュース番組を親子で一緒に見ながら、コミュニケーションをするような機会をつくってほしい旨を保護者会などで伝えることも、いいきっかけになるでしょう。

このとき、大人として知っておきたいことはたった一つ。それはインターネットの技術でも、パソコンやケータイの知識でもなく、「自宅でも学校でもネットカフェでも、個人のケータイからであっても、その書き込みの発信者が誰なのかを特定することは可能」という事実だけです。

学校でできること

「修学旅行のお寺めぐりのルートと交通費・拝観料を調べることが課題になっているのに、お寺の公式サイトがフィルタリングでひっかかって見られないなんてありえない！ フィルタリングの設定をゆるめてほしいと言ってもダメだった。先生たちに話をしてきて‼」

これは、我が家の息子が中三のとき、帰宅早々腹立たしげに言った文句です。結局、あきらめて京都市の観光案内サイトにアクセスして調べ、レポートを提出してきたそうです。

子どもたちが必要な情報までシャットアウトしてしまったり、知識欲や学びたいという気持ちまで疎外してしまうようなことは、教育に携わるものとして決して本意ではないと思います。また、18歳まで制限された中でのみ利用をしていると、多種多様な情報や仕掛けられたワナに対する免疫力がつかないまま大学生となり、自由な環境を手に入れた瞬間に大怪我をすることにもなりかねません。

思春期特有の興味もいっぱいの中学生、自由にさせるわけにはいかないという学校側の思いも理解できますが、中学生の判断力や成長に合わせた最低限のフィルタリングを検討し、大人の目の届く範囲で使わせるようなことが、彼らの健全な育成にはベスト。

フィルタリングは、利用者の成長に合わせることによって初めて学びがあります。大人の目が届けば、大人の判断力で危険を察知して教えてあげることもできるはず。コミュニケーションしながら経験によって学ぶことが、寺子屋的に一方的に教え込まれるより優れているのは、先生方が一番よくご存知ですよね。

読解力をつけよう！

日本の学生の読解力が落ちているという、哀しい事実が聞こえてくる昨今、PISA型読解力向上に取り組んでいる中学校も増えているようです。

インターネット上の情報、掲示板でのやりとりにおける相手の気持ち、迷惑メールかどうかの判断など、読解力が身に付けばこなせる問題はたくさんあります。怪しいメールを持ち寄って、実際にどんな文章で届くかを読みながら「ここが怪しい」「このあたりが危険っぽい」と紐解いてみるのも、面白い国語の授業になります。

模範解答がないと、トライするには不安な先生方には、こんな教材はどうでしょう。「PISA型 読解力向上ワークシート」見えない相手と仲良くなれるか？（新学社版）

パソコン通信時代の「見た目から入らず心のふれあいができたから、ネットで知り合って結婚するカップルもいる」というステキな事実が書いてある、俵万智さんの『言葉の虫めがね』の中の一節を表面で読み、裏面では『子どもといっしょに安心インターネット』冒頭にある「インターネットの向こう側にいる見えない相手を安易に信用することの危うさ」を読みます。そして、二つの文章を比較して、自分の考えを導き出すという内容です。

文豪の書いた作品の中から心理を読み取ることもいいですが、現代事情に即した文章から子どもたちに必要なノウハウを読み取らせることも大切。中学生にとっての身近な教材は、あちらこちらにあります。それらを読み解くことで身に付くノウハウは、IT時代に生きる彼らのたくましい知恵となって活かされるに違いありません。

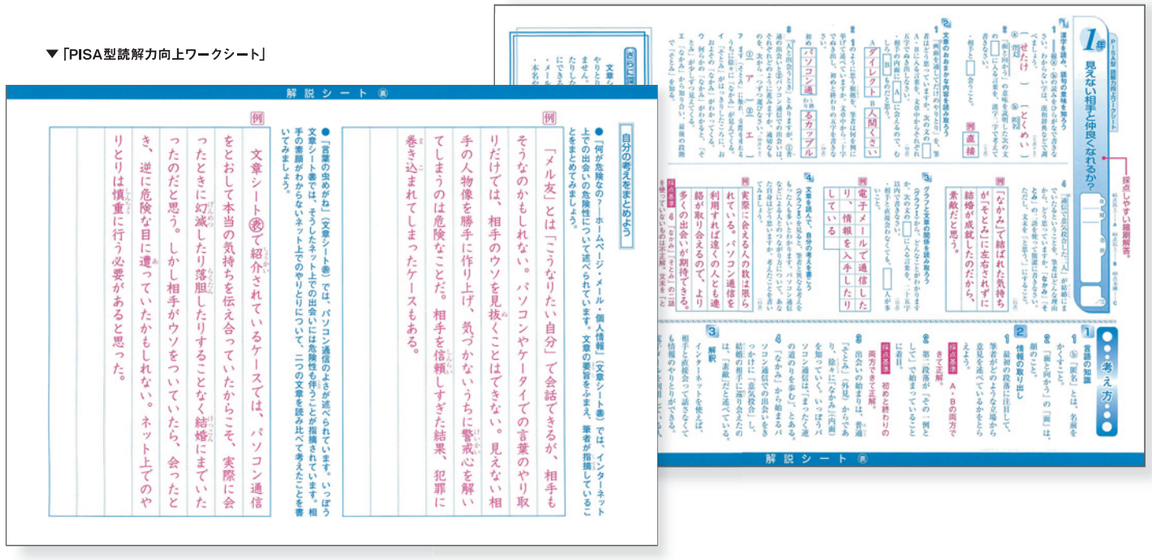
禁止するのではなく、一緒に考えながら歩む

中学生の携帯電話保有率は、地域によって千差万別ですが、先生方が把握しているよりも多いと考えるのが妥当です。「持っている」ことがわかったら、上級生から何かを言われそう…と、隠している一年生もいるという話を、実際に聞きました。「ケータイ」は手のひらサイズ、密かに持つことが可能なパーソナル・インターネット端末なのです。

大人が闇雲に禁止したり、大げさに叱ったりすることは、生徒たちを「大人に見つからない方法」へと走らせる要因にもなります。また、登下校の安全のためにケータイの持込を許可（校内での使用は不可）した学校では、紛失した生徒のケータイからアドレス帳にある友達宛に一斉にいやがらせメールが届くというトラブルがあったものの、「ケータイがなくなりました」と即座に堂々と言えたために、いじめや騒動にはならずに済んだということもあったそうです。

今の時代、ケータイを持っていたから登下校の危険から救われたという実例や、インターネットの掲示板で励まされて不登校から立ち直ったという子どもも少なくありません。正しく有効に活用する方法が身に付けば、未来を担う子どもたちにとって最強のツールになることは、間違いないのです。

人口減少傾向にある未来の日本経済を支えるには、効率と質の高い仕事をし、時間と距離を縮めることが重要な鍵となります。子どもたちが大人になって幸せな生活をしていくためにも、ネットワークを含むITツールは必需品なのです。

裁判記録をブログに書いてしまった司法修習生の話も記憶に新しいですが、公私の区別をつけ、公共のメディアであることを認識させながら、正しく活用する大人になれる導線を引いて歩ませてあげるのが、教育現場や身近な大人たちに課せられた役割ではないでしょうか。そうすれば、IT時代の申し子である彼らは、私たち大人たちの想像を超える活用方法を生み出すような、カッコいい立派な使い手になってくれるに違いありません。

▼「PISA型読解力向上ワークシート」